

## 若者講中

飯倉を歩く

江戸時代から昭和にかけて農業が主だった市内の各集落(江戸時代の村、現在の大字)の人たちは、子どもから高齢者に至るまで、何らかの講中(集団)に参加していました。例えば小・中学生は「天神講」、成人男性なら「庚申講」や「題目講」、女性では「子

安講」、「大師講」、「念仏講」などです。近年、そうした講中も時代とともに急速に消滅している現状にあり、各講中を知る手がかりは石造物の造立者名などに限られます。

飯倉地区の県道45号線と49号線の交



飯倉の庚申塔

差点近くの道路脇に「庚申塔」があり、これには「飯倉村台谷若者講中」と刻まれています。市内で確認されている「講中」による石造物約400基のうち「若者」が造立したものは、この塔を含め7基ほどで珍しいと言えます。

この「若者組」は江戸時代から村ごとに存在したとみられるものの、文書や記録などはまったくといっていいほど残されていません。時代により変化したと考えられますが一般的には男子が一定の年齢になると加入したとされます。その役割は村内の警備や道路修繕、消火活動などの作業を行ったり、親睦を図るためだったとされます。

飯倉の庚申塔は大樹のもとに、1800(寛政12・庚申)年正月7日に造立された高さ175cmほどの大きなもので右側面に「台谷若者講中」、左側面に「郷中安穩」、台石部分は裏面を除く3面に地名が刻まれ道標の役割も果たしています。

飯倉には千手院入り口付近に1716(享保元)年に「飯倉村全体」で造立した庚申塔があります。また時代が下るにつれ、男女の講中とも「池端谷中」、「中貫谷中」、「新田講中」など「くるわ(郭)」と呼ばれる小集落ごとに造塔されていったことが知られます。

(市文化財審議会委員・

依知川雅一)

関秘書課広報聴班

TEL 73・0080